

共生のきずなを求めて!

NPO 現代座

2025 年 12 月 1 日 発行
(通巻 507 号) 定価 100 円

現代座レポート No. 104

- ・「武蔵野の歌が聞こえる」公演 無事終了しました (1)
- ・「武蔵野の歌が聞こえる」公演 木下美智子 (2)
- ・「武蔵野の歌が聞こえる」を鑑賞して・丸山正子 (3)
- ・木村快の雑談会メモ「赤平市民ミュージカル」 (4~5)
- ・「誰でもできる朗読教室」長谷川葉月 (6)
- ・ハトノス『始発まで』青木文太郎 (7)
- ・お知らせ・会館日誌・会員入会・継続・寄付 (8)

NPO 現代座ホームページ <http://www.gendaiza.org/>

特定非営利活動法人 NPO 現代座 発行責任者：木村快

〒184-0003 東京都小金井市緑町 5 丁目 13 番 24 号 TEL 042-381-5165 (代) FAX042-381-6987



作 木村快
音楽 福沢達郎
ピアノ演奏 新井紀子



出演 木下美智子・東志野香・八木浩司・長谷川葉月

「武蔵野の歌が聞こえる」公演 無事終了しました

歌のある語り芝居「武蔵野の歌が聞こえる」は、2025年11月30日(日)12月1日(月)2日(火)の3日間、現代座3F小ホールで公演しました。
多くの方のご協力で3日とも満席になり、公演10日前には予約フォームでの予約をストップするという、今までに無い状況になりました。満席のため予約できなかった方には、本当に申しわけありませんでした。

「武蔵野の歌が聞こえる」は私たちの住む武蔵野一帯の物語です。このあたりは、江戸時代中期まで作物の採れない不毛の大地でした。
八代将軍徳川吉宗は、次々と起こった大地震と富士山の大噴火という大変な災害からの復興のため、荒地地だった武蔵野台地の開発を、大岡越前守忠相に命じます。
しかし日照りや飢饉の中での新田開発は困難を極め、何年たつてもうまくいきません。これを成し遂げたのが、府中押立村の名主、川崎平右衛門でした。
平右衛門は農民の中に眠る「助け合いの心」を生かして復興を進めたのです。

今まで「武蔵野の歌が聞こえる」は地下の小ホールで公演していました。今回は3F小ホールです。出演者は4人ですが、ピアノはグラランドピアノです。歌と演奏のバランスはとれるのか、狭い舞台で動きは大丈夫か。稽古の時は色々心配しました。しかし公演当日、集まってくくださった方々の笑い声や歌声に励まされ、とても充実した公演になりました。

公演終了後、たくさんの方から「子どもたちに見せたい」とか「自分の周りでやれるところは無いか考えたい」等のありがたいお言葉をいただきました。

実は一般に宣伝はしませんでした。公演の1週間前の11月23日(日)に、同じ会場で「本町二丁目町会の行事「秋の交流会」として、この「武蔵野の歌が聞こえる」を公演しました。たまたま地域活動の中で町会の会長さん、副会長さんと出会い、町会の行事としてやれないかという話になったのです。(詳しくは3ページに)

昨年は公民館の行事として公演し、今年は町会行事として公演することができました。こんな風に地域の色々な活動とつながって、人々の集いの場所になり、元気になれる劇場をつくっていったらうれしいです。

「武蔵野の歌が聞こえる」公演

「武蔵野の歌が聞こえる」は2014年に出演者14人で2時間近い合唱構成劇として初演。3年間連続して現代座ホールで公演しました。

昨年は小金井市貴井南センターの行事として公演させていただきました。その時に4人の出演者による新しい「語り芝居」を創りました。

今年、現代座3F小ホールでの公演を企画しました。しかし出演者の黒澤さんの病気による降板で、急遽、女3人男1人という新しい形で創りあげることになりました。稽古の中でみんなで相談してセリフを直したり、説明の小道具を増やしたり、分かりやすくするための工夫をこらしました。病気療養中の黒澤さんも駆けつけて演出的な視点で見てくださいました。



相次ぐ地震で幕府の財政は大赤字。将軍吉宗は改革を決意



飢えに苦しむ新田村を救おうと駆けつける平右衛門たち



会場の皆さんと「さくら咲く村」を歌う



公演終了後は自由に語り合う交流会

ピアノは今回も新井紀子さんが演奏してくれました。自分のピアノ教室の発表会で忙しい中頑張ってくださいました。

今回の公演の特徴は、最後のフィナーレで「さくら咲く村」という劇中歌を、会場の皆さんといっしょに歌ったことです。今回の「武蔵野の歌が聞こえる」は「語り芝居」とあるように、芝居の部分は舞台の中で役を演じ、芝居をしますが、語りの部分は直接会場の皆さんに語りかけ説明します。お客さんが舞台を眺めるのではなく、「ああそうだったのか、分かった分かった」とうなずきながら、いっしょに考え、感じ合えるような劇場にしたい、というのが、台本を創った木村快の願いでした。

稽古の中で「会場の人たちといっしょに歌おう」という案が出た時、「やってみよう」と思いました。

交流しながら歌を覚えて、公演の最後には舞台も客席もいっしょになって歌えたら、きっと楽しいと思います。

公演の日、予想以上に皆さんすぐに覚えて大きな声で歌ってくれました。そして公演後「歌ったのが楽しかった」と大好評でした。ホッとしました。

公演後には、そのまま会場でお客さんとの交流会を開きました。どこのどんな人がいっしょにこの場で同じ時を過ごしたのか、お互いに知り合える出会いの場を創りたかったのです。毎回たくさんの方が残ってお話してくださいました。

そして、40席の3F小ホールは、一体感を創り出すととてもいい劇場だと、改めて発見しました。

(木下美智子)

『武蔵野の歌が聞こえる』
 く歌のある語り芝居を鑑賞してく
 本町二丁目町会長 丸山正子



開演前に挨拶する丸山正子会長

『いまは小さなつぼみだが／いまに桜の咲き誇る
 ／玉川上水手いっぱい／小金井桜の里となる／カ
 合わせる里となる／さくら花咲く里となる』

芝居はフィナーレでみんなが唄う歌の練習から始
 まった。穏やかで優しい声に気持ち良く導かれ、メ
 ロデーに乗って歌詞も会場に響くようになった。
 本町二丁目町会「秋の交流会」として、今年も現
 代座にて上演の『武蔵野の歌が聞こえる』を鑑賞。

十一月二十三日(日・祝)、開場早々、杖をつき、
 隣家のご婦人に付き添われた高齢の男性がウールの
 暖かいマイスリッパを持参して一番乗り。その後ぞ

くぞくと町会員が集まり、未来へ繋がりを予感させ
 る子どもたちも三名数え、客席はほぼ満席。現代座
 は地藏通りを東小金井駅まで行く途中にあり、場所
 を知っている人は多いが、今まではつい素通りして
 しまう人がほとんどだったのでは。

今回、現代座の木下さんと(今日の舞台にもちろ
 ん登場)「わくわく都民農園小金井」の活動を介し
 て知り合うことができ、現代座や、『武蔵野の歌が
 聞こえる』の評判を聞いて心が動いた。そして「秋
 の交流会」で鑑賞できる方向を探すようになって
 行った。

お芝居のあら筋を聞くと、時は八代將軍吉宗の頃。
 大災害や飢饉から府中押立村出身で名主の平右衛門
 が中心となり、農民と助け合いの精神で、幕府も成
 し得なかった村を復興させた話。知恵と人を動かす
 才覚で、その後も八十二の村を作り上げ「川崎」の
 苗字が許される。不毛の武蔵野台地を緑豊かなみん
 なの大地に復興させたのだそうだ。

この話を通じて町会活動の大きな目標でもある、
 人と人が繋がり、いかに豊かなコミュニティを作
 るかを汲み取ることができ、更に町会員が一同に会
 し、この芝居を鑑賞することは意義深い。木下さん
 は町会の懐事情も分かって下さり、「本公演前の総
 リハーサルをご覧いただくのはいかがでしょうか」
 と。実施日も双方で調整を進め、今日のこの日に決
 まった次第。

『武蔵野の歌が聞こえる』のキャストはピアノス
 ト、照明係を入れ六名。四名の俳優は場面に応じて

語りを行ったり登場人
 物を演じたりしている。

舞台は入口より少しだ
 け高い位置にあり、右
 手奥にピアノが置かれ
 ている。舞台と客席は
 すぐ近く、豊かな表
 情や息遣いまでも感じ
 られる近さ。マイクは
 使わず、鍛えた肉声が
 隅々まで響く。照明は
 シンプルで、話の内容
 が複雑な場面では説明
 のPOPを分りやすく
 掲げたり、首から下げ
 ている箱から出したりして、飛び出す絵本のような効果
 を醸していた。農民がたくさん登場する芝居ゆえに衣装
 はとても質素で地味。フィナーレの場面では桜が咲く光
 景が頭の中に広がるが、この場面だからこそ例えば、ピ
 ンク色の布を二人で持って掲げたり揺らしたりして、桜
 いっぱいの景色を明るく華やかに演出して欲しかっ
 た。

酒好きの夫がまだ元気だった頃、一緒に飛鳥山の花見
 に行ったことを昨日のこのように思い出す。吉宗は庶
 民の娯楽にも力を注いだこと、玉川上水の花見も江戸の
 昔は賑やかだったこと、浮世絵等で知っているから。

フィナーレで唄った歌は次の朝になっても、勝手に口
 から出て、まだ続いている。



木村快との劇場文化雑談会メモ 赤平市民ミュージカル 木村快

木村快との「劇場文化雑談会」は、毎月10人ほどが集まって続けている。11月は現代座がNPO法人となるきっかけとなった赤平（あかびら）市の市民ミュージカルのことをテーマにしてみた。

それはたまたま11月6日に、北海道赤平市から高橋紀子さんと尾崎克子さんが訪ねて来てくれて、23年前の市民たちによる手作りミュージカル「虹に向かって」について、「私の人生にとつて、とても大事な出来事でした。改めてお礼に来ました」と言われたからだ。

◆赤平で市民ミュージカルを手伝ったのは2002年のことだった。前年の春、北海道帯広市の近くに滞在して作品の構想をしていた私のところへ、赤平から4人の中年の男女が訪ねて来た。「赤平でミュージカルを創ってみたい」と



木村快 高橋紀子さん 尾崎克子さん

いうのだ。運転してきたのは炭鉱の事故で下半身不随になったという菊池完治さんだった。

赤平市は北海道の旭川より南の一角に広がる大炭鉱地帯の中核の街である。炭鉱の最盛期には六万人が住む都市だった

たが、炭鉱閉山後は人口も激減し、さびれつつあった。町を元気にするために、子どもたちを巻き込んでミュージカルのようないきいきした活動をつくりたいというのだ。今まで演劇なんかやったことは無いけれど、ミュージカルを創ることで、何か新しい町のきずなを生み出したい、というのが彼らの願いだった。

「そりゃあ大変だね。赤平のどこかに空き家がないかなあ」とつぶやいたら「空家ならいくらでもあります」という。そんなわけで、しばらく赤平に住むことにした。

2001年9月、赤平に移り住んで一緒に考える場を作った。若い人の参加はほとんど無かったが、地域活動にかかわる女性たちが熱心に通ってきた。

そして11月末、実行委員会が発足した。参加者は四十人くらい。全員が数グループに分かれて「現在の自分たちの街をどう考えているのか、どんな取り組みにしたいのか」を自由に話し合ってみた。それをまとめると、

① 炭鉱閉山後、赤平はいつも昔の活気を取り戻したいと願いながらも、一方でいまわしい炭鉱のことは忘れようとしてきた。

② この街には炭鉱文化が残した助け合いの気風が残っている。もう一度赤平の街を見直してみよう。

③ 暮らしの立場から、誰でもが参加出来るお祭りのような取り組みにし、街のきずなを深める文化活動にしよう。

そしていよいよ作品作りに取りかかった。子ども

と大人がいっしょに汗を流す共通体験の場をつくりたい。農業、炭鉱、商業の三人の子どもたちが友だちになるところから始まり、その子どもたちが大人になり、次の世代の子どものために心を痛める人生のドラマにしたい、という大まかな構成が出来上がった。

◆次は音楽づくりだ。これは作曲家の岡田京子さんが指導を引き受けてくれた。岡田さんは「歌は自分の言葉でつくれる」と、自分で曲を作る講座をあちこちでやっていた。

そこで、みんなでこの町がどんな道のりを歩き、それぞれがどんな体験してきたのかを話し合った。開拓期の赤平、炭鉱全盛期、閉山で揺れた時代、そして現代と話は尽きない。その勢いでみんなに歌の歌詞をつくってもらった。思いつきの一行でもいいことにする。ズリ山、炭鉱の世話所、石炭の粉で真っ黒だった川の水といった炭鉱の歴史を語る言葉がたくさん出てきた。

みんな色々な曲をつくってきた。童謡風あり歌謡曲風あり、いいフレーズがたくさん出来た。

最後に私と岡田さんとまとめて、全16曲の合唱曲が完成した。

◆稽古は5月から始まった。稽古場は廃校になった旧幌岡小学校体育館。出演者は小中高生21名、大人30名、演奏者6名。車いすの菊池さんは一人で舞台装置のほとんどを作りあげた。

赤平には800人収容の大ホールがある。しかし、この活動の目的は地域のきずな作り。高齢者にも近くで見てもらえるように、廃校になった幌岡小学校体育

館と茂尻中学校体育館でも公演することにした。

体育館を劇場に変えるのは簡単ではない。そこは北海道公演中の現代座メンバーが駆けつけて担当した。しかし実は体育館にどん帳柱を建ててどん帳幕を仕込んだのは、現代座でも十数年ぶりだった。

公演は8月末から9月1日。3会場4回公演で二千人もの市民が集まり、大成功だった。

最後の文化センターの公演が終わると、出演者は一斉に出口へ飛び出していった。会館前の広場では出演者と町の人が抱き合っただけで泣いていた。特に子どもたちの泣いている姿が印象的だった。

私たちもあらためてこれが劇場の原点だったことを確信した。NPO現代座は本当にいい体験をさせて貰ったと思う。そこで正式のNPO法人を設立し、劇団名も「NPO現代座」とし、現在に至っている。

この時の実行委員会「絆（きずな）」はその後も活動を続け、赤平の最初の入植を描いた芝居『礎（いしずえ）』を作り上げた。そして今でも少人数ながら、紙芝居作りなどの活動を続けているそうだ。

創作市民ミュージカルに参加して

実行委員 高橋紀子

（ミニコミ誌「みらい」18号2002年9月20日発行）

「創作市民ミュージカル」についての考え方を百八十度変えたのは、NPO現代座の木村快さんとの出会いでした。はじめて会った快さんは、気取るわけでもなく、普段着の格好で、どこにでもいる普通のおじさんでした。「私のことを先生と呼ばないでくれ」

と言う快さんに、面白い人に会ってしまったなと思いました。

快さんが赤平に移り住んで最初の講座「劇場をつくる・地域をつくる」で聞いた話は印象的でした。

「子供は、大人の生き方を文化として受け継ぐことによって成長するものです。きずなを失った大人たちからは、成長する道筋が見えず、子供たちは途方にくれています。炭鉱が栄えた赤平なら、まだまだ市民の心に、あの炭鉱長屋の暖かい文化が残っているはず」

わたしは炭鉱長屋に生まれ育ちましたから、それは心ひそかに思っていたことでした。感動しました。

実行委員会が発足し、すべての人の意見を取り入れる方法で、赤平のことを話し合い、作品のあり方を考えました。さらに、それぞれが考えを持ち寄り、発表したものを快さんがまとめてくれました。

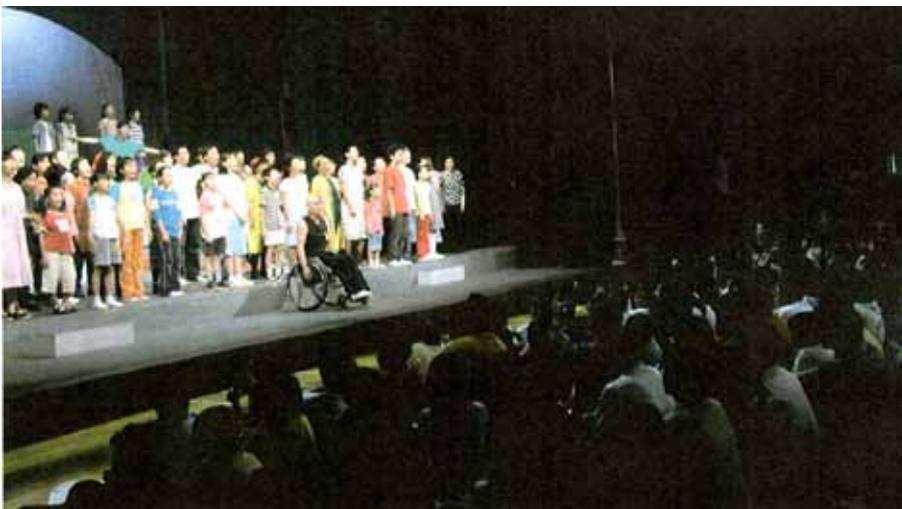
歌も、音楽家の岡田京子さんの作曲指導から始まりました。「赤平に住んでいるあなたたちの心に音符をつけなさい」と。そして出来上がった十六曲、赤平に住む人の心に響く曲が出来上がったと思います。

あとは、練習、練習、練習。子供たちも大人もみんな一生懸命でした。仕事あり、学校あり、家庭あり、それぞれのいろんな行事あり、大変だったと思います。その中で個人個人を認め合い、実行委員全員が本当に一生懸命がんばりました。気がついたら、今まで知らなかった人と心から挨拶を交わし、顔見知りにならなかった人たちとも親しく話ができるようになっていました。子供たちは、どこで会っても手を振ってくれるようになりました。『地域づくり』の意味が実感

できたのは、そんな時だったような気がします。

公演が終了した時、私たちの劇場に来てくださった方たちは、口々に「ありがとう。ありがとう」と言って、手を握ってくださいました。

「劇場とは舞台と観客が共感しあうこと、それが文化だよ」と言い続けた快さんは、興奮して手を振りながら帰っていくお客さんたちを見て、「私のやりたかったことはこういうことなんだ」と言われました。そのとき、私はこの舞台が、大成功だったことを確信しました。



市民ミュージカル「虹に向かって」 赤平文化センター公演 カーテンコール
中央の車いすの方が、菊池完治さん

「誰でもできる朗読教室」の活動

長谷川葉月

9月24日(水)と25日(木)の2日間で「誰でもできる朗読教室」の発表会がありました。4月から9月までの6ヶ月間、酷暑の夏にもめげずに通い続けて朗読を学んでくれた28名が出演しました。お客様が入る



↑9/24(水) 出演「2025年4月期 水曜教室」

(後列左より) 光野均、中根寿恵、小野寺優子、勝木ルミ子、田中佑美、原悠子、石川秀樹
(前列左より) 大久保節子、木谷道宣、江花幸子、長谷川葉月(講師)、佐藤忍、尾花はるみ

と、やはり朗読レベルが一段上がります。本番ではみなさん一番の読みを披露してくれました。
発表会では、自分たちが読みたい作品を自由に選んで10分以内で読むことになっています。ジャンルは小説、エッセイ、落語、童話、詩とさまざまです。また、戦後80年ということで、戦争にまつわる作品を読んだ人も数名いました。読み方も、椅子に座って静かに読むだけでなく、立ったり座ったり、小道具を使ったり、



↑9/25(木) 出演「2025年4月期 木曜教室」

(後列左より) 本橋一夫、吉田智紀、羽鳥宏子、本田典子、環笑子、野崎幸代、向井奈緒子、穴戸知美、五味孝宏
(前列左より) 今井治江、早乙女裕子、長谷川葉月(講師)、浜崎小枝子、江原恵美、古明地節子

動き回ったりと、いろいろな形があり、スタッフはそれに合わせて椅子を出し入れしたり、譜面台を置いたり、パネルを立てかけたりと、大忙し。でも、じつは、どんな朗読をしてくれるのか、楽しみでもあるのです。今回はついに、紙の本ではなくタブレットで朗読する人も出てきて、じつに新鮮でした。

1日目は16名のお客様に、2日目は20名のお客様に聞いていただきましたが、とくに2日目は、可愛らしいお客様がいらつしゃいました。小学生の子供たちが数名聞きに来てくれたのです。私は、朗読は、特別な道具を使わない一番身近なプレゼントだと思っていますので、我が子や家族に朗読を聞かせたいという思いを受講生のみなさんが抱いてくれることはとても嬉しいことでした。子供たちにとっては理解し難い作品もあったことと思いますが、頭の中で想像力を膨らませながら物語の世界を楽しんでくれたのでしょうか、じつと静かに集中力をもって聞いてくれました。

さて、現在11月期の朗読講座が始まって2ヶ月が経ちました。ウォーミングアップとして体操、発声、発音練習をしますが、以前よりも、より多くみなさんに文章を読んでもらうことを心がけています。普段練習するテキストは話し言葉に近い文章で書かれています。それでも書かれている文字を話すように朗読するのは一朝一夕にはいきませんので、何度も繰り返し声に出して、文章の持つリズムや息遣いなどを身につけてもらおうと考えてのことです。とはいえ、読みのテープや声質は人それぞれで、同じテキストでも一人として同じ読み方の人はいません。聞き合うことで互いの朗読を認め、自分の朗読にも生かしていく空気がクラスの中に生まれ始めていてこれから楽しみです。

ハトノス公演『始発まで』

青木 文太郎

2025年10月24日〜26日、現代座会館地下ホールにて、ハトノス・リーディング公演『始発まで』を実施しました。

ハトノスは私・青木文太郎が現代座の活動と並行して運営している演劇団体です。今年はいろいろなご縁に恵まれて、夏の『Pica』に続いて2作品目の上演となりました。1年のうちに2作品上演するのはハトノスとしては珍しく、時間的にも苦労が多かったですが、現代座のメンバーにも沢山助けられながら、何とか無事公演を終えることができました。

今回の演目『始発まで』は、広島路面電車と町の



↑ハトノス『始発まで』舞台写真



↑一般参加者を交えてのリハーサル風景



↑ハトノス『始発まで』（2025年上演版）出演者
 (後列左より) 渡辺 啓明、徳山 英伸
 (前列左より) 町田 大征 (劇団昴)、鈴木 千夏、環 幸乃

原爆からの復興の歴史を起点に、「原爆の歴史を語ること」について扱った群像劇です。2019年3月のハトノス旗揚げ公演の演目を、2023年にリーディング形式に再編し、今回も2023年版をベースに新たな出演者を迎えて制作していきましました。

この公演の特徴として、「事前に公募したお客さんに一部セリフを読んでもらうシーンがある」ことがあげられます。各回4〜6人程度の方に参加していただき、戦時中に路面電車を動かした女学生たちの証言や、当時の市民の声等のセリフを読んでもらいます。

もともと演劇の中で様々な事柄の「証言」を取り扱う中で、「役者―観客」の関係性だけでは何かが足りない気がするな、という感覚がありました。例えば、近年では戦争や原爆といった事象の体験者の方はどうんと減っており、代わりにそれらを体験していない

方が「伝承者」として、当事者に代わってその当時の記憶を伝える、という取り組みも一般化しています。そこには、「当事者」だけでなく、「体験者ではない」伝える人」という存在があつて初めて「聞き手」に証言が届く、という関係性があります。演劇において役者は「当事者」を「演じる」のだとしたら、その間にいる「伝える人」の存在も感じられるようにしたいな、というのがこの企画を立てるときに考えていたことでした。

なんだか難しいことをたくさん書いてしまいました。こんな企画を実現できたのも、「現代座」という場所が大きいなあと感じています。長谷川葉月さんの朗読教室等で現代座を利用してくださっている方や、小金井市の活動の中で現代座を知ってくださった方々にもリーディングに参加していただきました。また、そもそも「お客さんと舞台を作り上げる」という発想自体、多分私は現代座の公演を通して学んできたものだと思います。先日の現代座公演「武蔵野の歌が聞こえる」で、お客さんと一緒にラストの歌を歌っているのを見ながら、とても幸せな気持ちになりました。ハトノスでは一緒に歌を歌う、というのは難しいかもしれないけど、でもハトノスにできる方法で、お客さんにとって大切な時間になる作品を作っていけたらな、なんてことを考えます。この演目はまさにそう考えながら初めて作った演目であり、だからこそこうして繰り返し実施できることがとても嬉しいのです。様々な面でこのリーディング公演を支えてくださった皆様、本当にありがとうございました。とても幸せな作品です。

お知らせ

TEL : 042-381-5165
FAX : 042-381-6987

「出航」再演決定！



作 木村快
音楽 岡田京子
演出 八木澤賢

<公演予定>

2026年

5月1日(金) 14時～
2日(土) 14時～
3日(日) 14時～
4日(祝) 14時～
5日(祝) 14時～
6日(祝) 14時～

「出航」は2025年2月に現代座ホールで公演しました。おかげさまで公演は好評で、8ステージ全て満席になりました。見ていただけなかった方も多く、「再演して欲しい」という声も多くありました。

1980年代に創られた芝居ですが、公演してみても「これはまさに今の時代の芝居だ」と出演者もスタッフも思いました。

「再演しよう」と決めて、出演者のスケジュールを調整しました。一部新しいメンバーも加わり5月の連休に公演することを決めました。

是非おいでください。

現代座会館 9月～12月 活動日誌

9月7日 現代座会議

14日 「現代座レポート103号」発送作業

17日 「木村快との雑談会」

10月11日 現代座会議

22日 「木村快との雑談会」

11月16日 現代座会議

19日 「木村快との雑談会」

12月10日 「木村快との雑談会」

第3木曜日「緑町ふれあいサロン」

〔現代座ホール〕

9月1～7日 「おぼんろ」稽古

12～14日 演劇サークル「夢さしの」公演

18日 ワーカーズ新人研修「同胞」上映

10月1～10日 「ハトノス」稽古

11～15日 「青年劇場」稽古

18～26日 「ハトノス」稽古・公演

28日 劇団「獣申」稽古

31日 劇団「影法師」稽古

12月1～3日 「千夜一夜座」稽古

15～29日 「劇団青少」稽古

〔三階小ホール〕

9月20・26～28日 「さとし塾」稽古・公演

9月29・10月6日 小金井女声合唱団

10月12～20日 「リトル銀河」稽古

29日31日 「ポラーノ」稽古

10月1～12月2日 「武蔵野の歌が聞こえる」稽古・公演

隔水曜・木曜日 朗読教室

毎火曜・木曜日 ヨガ教室

〔二階サロン〕

9月27・11月1日 緑町第2町会役員会

NPO現代座の会員になってください

- 年間4回発行の活動レポートをお送りします。
- 会員による企画行事をお知らせします。
- お申し出があれば、上演舞台の録画DVDをお送りします。

★年会費（現代座レポート購読料を含む）

一般会員 3,000円
協賛会員 10,000円（1口以上）
正会員 10,000円

郵便振替口座番号 00110-7-703151 NPO現代座